

A  
i  
g  
a  
n  
d  
o

私の個人主義

夏目漱石



# 私の個人主義



藍岩堂



私は今日初めてこの学習院というものの中に這入りました。もっとも以前から学習院は多分この見当だろうぐらいに考えていたには相違ありませんが、はっきりとは存じませんでした。中へ這入ったのは無論今日が初めてでございます。

さきほど岡田さんが紹介かたがたちちょっとお話になった通りこの春何か講演をというご注文でありましたが、その当時は何か差支があつて、——岡田さんの方が当人の私よりよくご記憶と見えてあなたがたにご納得のできるようにただいまご説明がありました、とにかくひとまずお断りを致さなければならん事になりました。しかしただお断りを致すのもあまり失礼と存じまして、この次には参りますからという条件をつけ加えておきました。その時念のためこの次はいつごろになりますかと岡田さんに伺いましたら、此年の十月だというお返事であつたので、心のうちに春から十月までの日数を大体繰ってみて、それだけの時間があればそのうちにどうにかできるだろうと思つたものですから、よろしゅうございますとはっきりお受合申したのであります。ところが幸か不幸か病気に罹りまして、九月いっぱい床についておりますうちにお約束の十月が参りました。十月にはもう臥せつてはおりませんでしたけれども、何しろひよろひよろするので講演はちょっとむずかしかつたのです。しかしお約束を忘れてはならないのですから、腹の中では、今に何か云つて来られるだろう来られるだろうと思つて、内々は怖がっていました。

そのうちひよろひよろもついに癒つてしまつたけれども、こちらからは十月末まで何のご沙汰もなく打ち過ぎました。私は無論病気の事をご通知はしておきませんでした、二三の新聞にちょっと出たという話ですから、あるいはその辺の事情を察せられて、誰かが私の代りに講演をやつて下さつたのだらうと推測して安心して出しました。ところへまた岡田さんがまた突然見えたのであります。岡田さんはわざわざ長靴を穿いて見えたのであります。（もっとも雨の降る日であつたからでもありましようが、）そう云つた身拵えで、早稲田の奥まで来て下すつて、例の講演は十一月の末まで繰り延ばす事にしたから約束通りやつてもらいたいというご口上なのです。私はもう責任を逃れたように考えていたものですから実は少々驚ろきました。しかしまだ一カ月も余裕があるから、その間にどうかなるだらうと思つて、よろしゅうございますとまたご返事を致しました。

右の次第で、この春から十月に至るまで、十月末からまた十一月二十五日に至るまでの間に、何か纏つたお話をすべき時間はいくらでも拵えられるのですが、どうも少し気分が悪くつて、そんな事を考えるのが面倒でたまらなくなりました。そこでまあ十一月二十五日が来るまでは構うまいという横着な料簡を起して、ずるずるべつたりとその日その日を送つていたのです。いよいよと時日が逼つた二三日前になつて、何か考えなければならないという気が少ししたので

すが、やはり考えるのが不愉快なので、とうとう絵を描いて暮らしてしまいました。絵を描くと  
いうと何かえらいものが描けるように聞えるかも知れませんが、実は他愛もないものを書いて、  
それを壁に貼りつけて一人で二日も三日もぼんやり眺めているだけなのです。昨日でしたかある  
人が来て、この絵は大変面白い——いや面白いと云ったのではありません、面白い気分の時に描  
いた画らしく見えると云ってくれたのでした。それから私は愉快だから描いたのではない、不愉  
快だから描いたのだと云って私の心の状態をその男に説明してやりました。世の中には愉快でじ  
っとしてられない結果を画にしたり、書にしたり、または文にしたりする人がある通り、不愉  
快だから、どうかして好い 心持 になりたいと思って、筆を執って画なり文章なりを作る人もあ  
ります。そうして不思議にもこの二つの心的状態が結果に現われたところを見るとよく一致して  
いる場合が起るのです。しかしこれはほんのついでに申し上る事で、話の筋に関係した問題でも  
ありませんから深くは立ち入りません。——何しろ私はその変な画を眺めるだけで、講演の内容  
をちっとも組み立てずに暮らしてしまったのです。

そのうちいよいよ二十五日が来たので、否でも応でもここへ顔を出さなければすまない事にな  
りました。それで今朝少し 考 を纏めてみましたが、準備がどうも不足のようです。とてもご満  
足の行くようなお話はできかねますから、そのつもりでご 辛防 を願います。

この会はいつごろから始まって今日まで続いているのか存じませんが、そのつどあなたがたが  
よその人を連れて来て、講演をさせるのは、一般の慣例として毫も不都合でないとも私も認めてい  
るのですが、また一方から見ると、それほどあなた方の希望するような面白い講演は、いくらど  
こからどんな人を引張って来ても容易に聞かれるものではなかろうとも思うのです。あなたがた  
にはただよその人が珍らしく見えるのではありますまいか。

私が落語家から聞いた話の中にこんな諷刺的のがあります。——昔しあるお大名が二人目黒辺  
へ鷹狩に行つて、所々方々を馳け廻った末、大変空腹になったが、あいにく弁当の用意もなし、  
家来とも離れ離れになって口腹を充たす糧を受けず、仕方なしに二人はそこにある  
汚ない 百姓家 へ馳け込んで、何でも好いから食わせろと云ったそうです。するとその農家の  
爺さんと婆さんが気の毒がって、ありあわせの秋刀魚を炙って二人の大名に麦飯を勧めたと云い  
ます。二人はその秋刀魚を 肴 に非常に旨く飯を済まして、そこを立出たが、翌日になつても昨  
日の秋刀魚の 香 がぷんぷん鼻を衝くといった始末で、どうしてもその味を忘れる事ができない  
のです。それで二人のうちの一人が他を招待して、秋刀魚のご馳走をする事になりました。その  
旨を 承 わつて驚ろいたのは家来です。しかし主命ですから 反抗 する訳にも行きませんので、  
料理人に命じて秋刀魚の細い骨を毛抜で一本一本抜かして、それを味淋か何かにつけたのを、ほ  
どよく焼いて、主人と客とに勧めました。ところが食う方は腹も減つていず、また馬鹿丁寧な料  
理方で秋刀魚の味を失つた 妙 な肴を箸で突つてみたところで、ちっとも旨くないのです。

そこで二人が顔を見合せて、どうも秋刀魚は目黒に限るねといったような変な言葉を発したと云うのが話の落おちになっているのですが、私から見ると、この学習院という立派な学校で、立派な先生に始終接している諸君が、わざわざ私のようなものの講演を、春から秋の末まで待ってもお聞きになろうというのは、ちょうど大牢の美味に飽いた結果、目黒の秋刀魚がちょっと味わってみたくなっただのではないかと思われるのです。

この席におられる大森教授は私と同年かまたは前後して大学を出られた方ですが、その大森さんが、かつて私にどうも近頃ちかごろの生徒は自分の講義をよく聴きかないで困る、どうも真面目まじめが足りないで不都合ふつごうだというような事を云われた事があります。その評はこの学校の生徒についてではなく、どこかの私立学校の生徒についてだったろうと記憶していますが、何しろ私はその時大森さんに対して失礼な事を云いました。

ここで繰り返していうのもお恥ずかしい訳ですが、私はその時、君などの講義をありがたがって聴く生徒がどこの国にいるものかと申したのです。もっとも私の主意はその時の大森君には通じていなかったかも知れませんが、この機会を利用して、誤解を防いでおきますが、私どもの書生時代、あなたがたと同年輩どうねんぱい、もしくはもう少し大きくなった時代、には、今のあなたがたよりよほど横着で、先生の講義などはほとんど聴いた事がないと云っても好いくらいのものでした。もちろんこれは私や私の周囲のものを本位として述べるのでありますから、圏外けんがいにいたものには通用しないかも知れませんが、どうも今の私から振り返ってみると、そんな気がどこかでするように思われるのです。現にこの私は上部うわべだけは温順らしく見えながら、けっして講義などに耳を傾かたむける性質ではありませんでした。始終怠なまけてのらくらしていました。その記憶をもつて、真面目な今の生徒を見ると、どうしても大森君のように、彼らを攻撃こうげきする勇気が出て来ないのです。そう云った意味からして、つい大森さんに対してすまない乱暴を申したのであります。今日は大森君に詫あやまるためにわざわざ出かけた次第ではありませんけれども、ついでだからみんなのいる前で、謝罪しておくのです。

話がついとんだところへ外れてしまいましたから、再び元へ引き返して筋の立つように云いますと、つまりこうなるのです。

あなたがたは立派な学校に入って、立派な先生から始終指導を受けていらっしゃる、またその方々の専門的もしくは一般いっぱんてき的の講義を毎日聞いていらっしゃる。それなのに私みたようなものを、ことさらによそから連れて来て、講演を聴こうとなされるのは、ちょうど先刻お話したお大名が目黒の秋刀魚を賞翫しょうがんしたようなもので、つまりは珍しいから、一口食ってみようという料簡じゃないかと推察されるのです。實際をいうと、私のようなものよりも、あなたがたが毎日顔を見ていらっしゃる常雇じょうやといの先生のお話の方がよほど有益でもあり、かつまた面白かろうとも思われるのです。たとい私にしたところで、もしこの学校の教授にでもなっていたならば、単に新らしい刺戟しげきのないというだけでも、このくらい的人数が集って私の講演をお聴きになる熱心こうきしんなり好奇心こうきしんなりは起るまいと考えるのですがどんなものでしょう。

私がなぜそんな仮定をするかという、この私は現に昔しこの学習院の教師になろうとした事

があるのです。もっとも自分で運動した訳でもないのですが、この学校にいた知人が私を推薦すいせんしてくれました。その時分の私は卒業する間際まで何をして衣食の道を講じていいか知らなかったほどの迂濶者うかつものでしたが、さていよいよ世間へ出てみると、懐手ふところをして待っていたって、下宿料が入って来る訳でもないので、教育者になれるかなれないかの問題はとにかく、どこかへ潜りもぐ込む必要があったので、ついこの知人のいう通りこの学校へ向けて運動を開始した次第であります。その時分私の敵が一人ありました。しかし私の知人は私に向ってしきりに大丈夫らしい事をいうので、私の方でも、もう任命されたような気分になって、先生はどんな着物を着なければならぬのかなどと訊いてみたものです。するとその男はモーニングでなくては教場へ出られないと云いますから、私はまだ事のきまらない先に、モーニングを逃あつらえてしまったのです。そのくせ学習院とはどこにある学校かよく知らなかったのだから、すこぶる変なものです。さていよいよモーニングが出来上ってみると、あに計らんやせっかく頼みにしていた学習院の方は落第と事がきまったのです。そうしてもう一人の男が英語教師の空位を充たす事になりました。その人は何という名でしたか今は忘れてしまいました。別段悔しくも何ともなかったからでしょう。何でも米国帰りの人とか聞いていました。——それで、もしその時にその米国帰りの人が採用されずに、この私がまぐれ当りに学習院の教師になって、しかも今日まで永続していたなら、こうした鄭重ていちょうなお招きを受けて、高い所からあなたがたにお話をする機会もついに来なかったかも知れずまい。それをこの春から十一月までも待って聴いて下さろうというのは、とりも直さず、私が学習院の教師に落第して、あなたがたから目黒の秋刀魚のように珍らしがられている証拠しょうこではありませんか。

私はこれから学習院を落第してから以後の私について少々申上げようと思います。これは今までお話をして来た順序だからという意味よりも、今日の講演に必要な部分だからと思って聴いていただきたいのです。

私は学習院は落第したが、モーニングだけは着ていました。それよりほかに着るべき洋服は持っていなかったのだから仕方がありません。そのモーニングを着てどこへ行ったと思いますか？

その時分は今と違って就職の途は大変楽でした。どちらを向いても相当の口は開いていたように思われるのです。つまりは人が払底なためだったのでしょう。私のようなものでも高等学校と、高等師範からほとんど同時に口がかかりました。私は高等学校へ周旋しゅうせんしてくれた先輩に半分しょうだく承諾いを与えながら、高等師範の方へも好い加減な挨拶あいさつをしてしまったので、事が変な具合にもつれてしまいました。もともと私が若いから手ぬかりやら、不行届ふゆきとどきがちで、とうとう自分に崇たって来たと思えば仕方がありませんが、弱らせられた事は事実です。私は私の先輩なる高等学校の古参の教授の所へ呼びつけられて、こっちへ来るような事を云いながら、他にも相談をされほかては、仲に立った私が困ると云って譴責けんせきされました。私は年の若い上に、馬鹿の肝癩持かんしゃくもちですから、いっそ双方とも断ってしまったら好いだろうと考えて、その手続きをやり始めたのです。するとある日当時の高等学校長、今ではたしか京都の理科大学長をしている久原さんから、ちょ

っと学校まで来てくれという通知があったので、さっそく出かけてみると、その座に高等師範の  
かのうじごろう  
校長嘉納治五郎さんと、それに私を周旋してくれた例の先輩がいて、相談はきまった、こっちに  
えんりよ い いぎ いや  
遠慮は要らないから高等師範の方へ行ったら好かろうという忠告です。私は行がかり上否だと  
やっかい  
は云えませんから承諾の旨を答えました。が腹の中では厄介な事になってしまったと思わざるを  
得なかったのです。というものは今考えるともったいない話ですが、私は高等師範などをそれほ  
どありがたく思っていなかったのです。嘉納さんに始めて会った時も、そうあなたのように教育  
者として学生の模範もはんになれというような注文だと、私にはとても勤まりかねるからと 逡巡しゅんじゆん した  
くらいでした。嘉納さんは上手な人ですから、否そう正直に断られると、私はますますあなた  
に来ていただきたくなると云って、私を離さなかったのです。こういう訳で、未熟な私は双方  
の学校を懸持かけもちしようなどという 慾張根性よくばりこんじょう は更になかったにかかわらず、関係者に要らざる手  
数をかけた後、とうとう高等師範の方へ行く事になりました。

しかし教育者として偉えらくなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどう  
きゅうくつ おそ  
も 窮屈で恐れ入りました。嘉納さんもあなたはあまり正直過ぎて困ると云ったくらいですから  
、あるいはもっと横着をきめていてもよかったのかも知れません。しかしどうあっても私には  
ふむき  
不向な所だとしか思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ着  
かしゃ  
屋が菓子家へ手伝いに行ったようなものでした。

一年の後私はとうとう田舎の中学へ赴任しました。それは伊予の松山にある中学校です。あなた  
がたは松山の中学と聞いてお笑いになるが、おおかた私の書いた「坊ちゃん」でもご覧になっ  
たのでしょう。「坊ちゃん」の中に赤シャツという渾名あだなをもっている人があるが、あれはいった  
い誰の事だと私はその時分よく訊かれたものです。誰の事だって、当時その中学に文学士と云っ  
たら私一人なのですから、もし「坊ちゃん」の中の人物を一々実在のものとして認めるならば、赤シ  
ャツはすなわちこういう私の事にならなければならぬので、——はなはだありがたい合せと申  
上げたいような訳になります。

松山にもたった一カ年しかおりませんでした。立つ時に知事が留めてくれましたが、もう先方  
と内約ができていたので、とうとう断ってそこを立ちました。そうして今度は熊本くまもとの高等学校に  
こし す  
腰を据えました。こういう順序で中学から高等学校、高等学校から大学と順々に私は教えて来た  
経験をもっていますが、ただ小学校と女学校だけはまだ足を入れた 試ためし がございません。

熊本には大分長くおりました。突然文部省から英国へ留学をしてはどうかという内談のあった  
のは、熊本へ行ってから何年目になりましょうか。私はその時留学を断ろうかと思いました。  
それは私のようなものが、何の目的ももたずに、外国へ行ったからと云って、別に国家のために  
役に立つ訳もなかろうと考えたからです。しかるに文部省の内意を取次いでくれた教頭が、それは  
先方の見込みなのだから、君の方で自分を評価する必要はない、ともかくも行った方が好かろ  
うと云うので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。しかし果せる  
はた  
かな何もする事がないのです。

それを説明するためには、それまでの私というものを一応お話ししなければならぬ事になり

ます。そのお話がすなわち今日の講演の一部分を構成する訳なのですからそのつもりでお聞きを願います。

私は大学で英文学という専門をやりました。その英文学というものはどんなものかとお尋ねに  
なるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも何が何だかまあ夢中むちゅう だったのです。その頃は  
ジクソンという人が教師でした。私はその先生の前で詩を読ませられたり文章を読ませられたり  
、作文を作って、冠詞かんしが落ちていと云って叱しかられたり、発音おこが間違っていると怒られたりしま  
した。試験にはウォズウォースは何年に生れて何年に死んだとか、シェクスピヤのフォリオは  
幾通りあるかとか、あるいはスコットの書いた作物を年代順ならに並べてみろとかいう問題ばかり出  
たのです。年の若いあなた方にもほぼ想像ができるでしょう、はたしてこれが英文学かどうか  
という事が。英文学はしばらく措おいて第一文学とはどういうものか、これではどうわかてい解るは  
ずがありません。それなら自力でそれを窮きわめ得るかめくらと云うと、まあ盲目かきのぞの垣てがかり覗ききと云うような  
もので、図書館に入って、どこをどううろついても手掛てがかりがないのです。これは自力の足りないば  
かりでなくその道とぼに関する書物も乏とぼしかったのだらうと思います。とにかく三年勉強して、つい  
に文学は解らずじまいだったのです。私の煩悶はんもんは第一ここに根ざしていたと申し上げても差支な  
いでしょう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になったというより教師にされてしま  
ったのです。幸に語学あやの方は怪にしいにせよ、どうかこうかお茶にごを濁くして行かれるから、その日そ  
の日はまあ無事に済んでいましたが、腹の中は常に空虚くうきよでした。空虚ならいっそ思い切りがよか  
ったかも知れませんが、何だか不愉快にな煮え切らない漠然ぼくぜんたるものが、至る所に潜ひそんでいるよ  
うで堪たまらないのです。しかも一方では自分の職業としている教師というものに少しの興味もも  
ち得ないのです。教育者であるという素因の私に欠乏している事は始めから知っていましたが、  
ただ教場で英語を教える事がすでに面倒なすきのだから仕方ありません。私は始終中腰で隙すきがあっ  
たら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのが  
あるようで、無いようで、どこを向いても、思い切ってやっとな飛び移れないのです。

私はこの世に生れた以上何かしなければならん、と云うて何をして好いか少しも見当がつか  
ない。私はちょうど霧きりの中に閉じ込められた孤独こどくの人間のように立ち竦すくんでしまったのです。そ  
うしてどこからか一筋さの日光が射して来ないかしらんという希望よりも、こちらから探照灯を用  
いてたひとすじった一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました。ところが不幸にしてどち  
らの方角を眺めてもぼんやりしているのです。ぼうっとしているのです。あたかも囊ふくろの中に詰つ  
められて出る事のできない人のような気持がするのです。私は私の手にただ一本の錐きりさえあれば  
どこか一カ所突き破あせぬって見せるのだがと、焦燥り抜いたのですが、あいにくその錐は人から与え  
られる事もなく、また自分で発見する訳にも行かず、ただ腹の底ではこの先自分はどうなるだろ  
うと思って、人知れず陰鬱いんうつな日を送ったのであります。

私はこうした不安いだを抱いて大学を卒業し、同じ不安ひっこを連れて松山から熊本へ引越し、また同様  
の不安たを胸の底わたに畳んでついに外国まで渡ったのであります。しかしいったん外国へ留学する以

上は多少の責任を新たに自覚させられるにはきまっています。それで私はできるだけ骨を折って何かしようと努力しました。しかしどんな本を読んでも依然として自分は囊の中から出る訳に参りません。この囊を突き破る錐は 倫敦 中探して歩いても見つかりそうになかったのです。私は下宿の一間の中で考えました。つまらないと思いました。いくら書物を読んでも腹の足にはならないのだと 諦めました。同時に何のために書物を読むのか自分でもその意味が解らなくなって来ました。

この時私は始めて文学とはどんなものであるか、その 概念 を根本的に自力で作り上げるよりほかに、私を救う途はないのだと悟ったのです。今までは全く他人本位で、根のない 萍 のように、そこいらをでたらめに漂よっていたから、駄目であったという事によやく気がついたのです。私のここに他人本位というのは、自分の酒を人に飲んでもらって、後からその品評を聴いて、それを理が非でもそうだとしてしまういわゆる人真似を指すのです。一口にこう云ってしまえば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人真似をする訳がないと不審がられるかも知れませんが、事實はけっしてそうではないのです。近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向うの人がとやかくいうので日本人もその尻馬に乗って騒ぐのです。ましてその頃は西洋人のいう事だと云えば何でもかでも 盲従 して威張ったものです。だからむやみに片仮名を並べて人に吹聴 して得意がった男が比々皆 是なりと云いたいくらいごろごろしていました。他の悪口ではありません。こういう私が現にそれだったのです。たとえばある西洋人が甲という同じ西洋人の作物を評したのを読んだとすると、その評の当否はまるで考えずに、自分の腑に落ちようが落ちまいが、むやみにその評を触れ散らかすのです。つまり鵜呑と云ってもよし、また機械的の知識と云ってもよし、とうていわが所有とも血とも肉とも云われぬ、よそよそしいものを 我物顔 にしゃべって歩くのです。しかるに時代が時代だから、またみんながそれを 賞めるのです。

けれどもいくら人に賞められたって、元々人の借着をして威張っているのだから、内心は不安です。手もなく 孔雀 の羽根を身に着けて威張っているようなものですから。それでももう少し浮華を去って 摯実 につかなければ、自分の腹の中はいつまで経ったって安心はできないという事に気がつき出したのです。

たとえば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云っても、それはその西洋人の見るところで、私の参考にならん事はないにしても、私にそう思えなければ、とうてい 受売 をすべきはずのものではないのです。私が独立した一個の日本人であって、けっして英国人の奴婢でない以上はこれくらいの見識は国民の一員として 具えていなければならない上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。

しかし私は英文学を専攻する。その本場の批評家のいうところと私の 考 と 矛盾 してはどうも普通の場合気が引ける事になる。そこでこうした矛盾がはたしてどこから出るかという事を考

えなければならなくなる。風俗、人情、習慣、<sup>さかのぼ</sup> 溯 っては国民の性格皆この矛盾の原因になっているに相違ない。それを、普通の学者は単に文学と科学とを混同して、甲の国民に気に入るものは<sup>おつ</sup> きっと乙の国民の賞讃を得るにきまっている、そうした<sup>ふく</sup> 必然性が含まれていると誤認してかかる。そこが間違っていると云わなければならない。たといこの矛盾を<sup>ゆうわ</sup> 融和する事が不可能にしても、それを説明する事はできるはずだ。そうして単にその説明だけでも日本の<sup>ぶんだん</sup> 文壇には一道の<sup>あた</sup> 光明を投げ与える事ができる。——こう私はその時始めて悟ったのでした。はなはだ<sup>おそ</sup> 遅まきの話で<sup>ざんき</sup> 慚愧の<sup>いたり</sup> 至 でありますけれども、<sup>いつわ</sup> 事実だから <sup>りっきゃくち</sup> 偽 らないところを申し上げます。

私はそれから文芸に対する自己の<sup>かた</sup> 立脚地 を堅めるため、堅めるというより新しく建設するために、<sup>えん</sup> 文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字をようやく考えて、その自己本位を立証するために、<sup>てつがくてき</sup> 科学的な研究やら <sup>しきく</sup> 哲学的の<sup>ふけ</sup> 思索に耽り出したのであります。今は時勢が違いますから、この辺の事は多少頭のある人にはよく解せられているはずですが、その頃は私が<sup>ようち</sup> 幼稚な上に、世間がまだそれほど進んでいなかったので、私のやり方は実際やむをえなかったのです。

私はこの自己本位という言葉<sup>にぎ</sup> を自分の手に握ってから大変強くなりました。<sup>かれ</sup> 彼ら何者ぞやと<sup>きがい</sup> 氣概が出ました。今まで <sup>ぼうぜん</sup> 茫然 と自失していた私に、ここに立って、この道からこう行かなければ<sup>さしず</sup> ならないと指図をしてくれたものは実にこの自我本位の四字なのであります。

自白すれば私はその四字から新たに出立したのであります。そうして今のようにただ人の尻馬にばかり乗って空騒ぎをしているようでははなはだ心元ない事だから、そう西洋人ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の<sup>しょうがい</sup> 生涯の事業としようと考えたのです。

その時私の不安は全く消えました。私は<sup>いんうつ</sup> 軽快な心をもって <sup>ひゆ</sup> 陰鬱な倫敦を眺めたのです。比喻で申すと、私は多年の間 <sup>おうのう</sup> 懊悩 した結果ようやく自分の <sup>つるはし</sup> 鶴嘴 をがちりと<sup>ほ</sup> 鉋脈に掘り当てたような気がしたのです。なお<sup>く</sup> 繰り返していうと、今まで霧の中に閉じ込まれたものが、ある角度の方向で、明らかに自分の進んで行くべき道を教えられた事になるのです。

かく私が<sup>けいはつ</sup> 啓発 された時は、もう留学してから、一年以上経過していたのです。それでとても外国では私の事業を仕上げる訳に行かない、とにかくできるだけ材料を纏めて、本国へ立ち帰った後、立派に始末をつけようという気になりました。すなわち外国へ行った時よりも帰って来た時の方が、<sup>ぐうぜん</sup> 偶然 ながらある力を得た事になるのです。

ところが帰るや否や私は衣食のために <sup>ほんそう</sup> 奔走 する義務がさっそく起りました。私は高等学校へも出ました。大学へも出ました。後では金が足りないので、私立学校も一軒 <sup>けんかせ</sup> 稼 ぎました。その上私は <sup>しんけいすいじゃく</sup> 神経衰弱 に罹りました。最後に下らない創作などを雑誌に載せなければならない仕儀に <sup>の</sup> 陥

りました。いろいろの事情で、私は私の企くわだてた事業を半途で中止してしまいました。私の著わあらした文学論はその記念というよりもむしろ失敗の亡骸なきながらです。しかも畸形児きけいじの亡骸です。あるいは立派じしん たおに建設されないうちに地震で倒された未成市街はいきよの廃墟のようなものです。

しかしながら自己本位というその時得た私の考は依然としてつづいています。否年を経るに従ってだんだん強くなります。著作的事業としては、失敗に終わりましたけれども、その時確かに握ひんった自己が主で、他は賓であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。私はその引続きとして、今日なお生きていられるような心持がします。実はこうした高い壇かけの上に立って、諸君を相手に講演をするのもやはりその力のお蔭かも知れません。

以上はただ私の経験だけをざっとお話ししたのでありますけれども、そのお話しを致した意味は全くあなたがたのご参考になりはしまいかという老婆心ろうぼしんからなのであります。あなたがたはこれからみんな学校を去って、世の中へお出かけになる。それにはまだ大分時間のかかる方もございましょうし、またはおっつけ実社界に活動なさる方もあるでしょうが、いずれも私の一度経過はんもんした煩悶くりかえ（たとい種類は違っても）を繰返しがちなものじゃなかろうかと推察されるのです。私のようにどこか突き抜けたくっても突き抜ける訳にも行かず、何か掴つかみたくっても薬缶頭やかんあたまを掴むようにつつつして焦燥じれっなくなったりする人が多分あるだろうと思うのです。もしあなたがたのうちですでに自力で切り開いた道を持っている方は例外であり、また他ひとの後に従って、それで満足して、在来の古い道を進んで行く人も悪いとはけっして申しませんが、（自己に安心ふずいと自信がしっかり附随しているならば、）しかしもしそうでないとしたならば、どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んで行かなくてはいけないでしょう。いけないというのは、もし掘りあてる事ができなかったなら、その人は生涯不愉快で、始終中腰になって世の中にまごまごしていなければならないからです。私のこの点を力説するのは全くそのためで、何も私もはんを模範になさいという意味ではけっしてないのです。私のようなつまらないものでも、自分で自分が道をつつつ進み得たという自覚があれば、あなた方から見てその道がいかに下らないにせよ、それはあなたがたの批評と観察で、私には寸毫すんごうの損害がないのです。私自身はそれで満足するつもりであります。しかし私自身がそれがため、自信と安心をもっているからといって、同じ径路けいろがあなたがたの模範になるとはけっして思っていないのですから、誤解してはいけません。

それはとにかく、私の経験したような煩悶かんていがあなたがたの場合にもしばしば起るに違いないと私は鑑定しているのですが、どうでしょうか。もしそうだとすると、何かに打ち当たるまで行くという事は、学問をする人、教育を受ける人が、生涯の仕事としても、あるいは十年二十年の仕事としても、必要じゃないでしょうか。ああここにおれの進むべき道があった！ ようやく掘り当てた！ こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしょうか。容易こわに打ち壊されもたない自信が、その叫び声とともにむくむく首を擡げて来るのではありませんか。すでにその域に達している方も多数のうちにはあるかも知れませんが、もし途中で霧もやか霽ぎせいのために懊惱はらしてられる方があるならば、どんな犠牲を払っても、ああここだと

ほりあ  
いう掘当てるところまで行ったらよろしかろうと思うのです。必ずしも国家のためばかりだから  
というわけではありません。またあなた方のご家族のために申し上げる次第でもありません。あな  
たがた自身の幸福のために、それが絶対に必要じゃないかと思うから申し上げるのです。もし私  
の通ったような道を通り過ぎた後なら致し方もないが、もしどこかにこだわりがあるなら、それ  
ふみつぶ  
を踏潰すまで進まなければ駄目ですよ。——もっとも進んだってどう進んで好いか解らないのだ  
から、何かにぶつかる所まで行くよりほかに仕方がないのです。私は忠告がましい事をあなたが  
たに強いる気はまるでありませんが、それが将来あなたがたの幸福の一つになるかも知れないと  
だま  
思うと黙っていられなくなるのです。腹の中の煮え切らない、徹底的に、ああでもありこうで  
なまこ  
もあるというような海鼠のような精神を抱いてぼんやりしては、自分が不愉快ではないか知  
いだ  
らんとするからというのです。不愉快でないとおっしゃればそれまでです、またそんな不愉快は通  
り越しているとおっしゃれば、それも結構であります。願くは通り越してありたいと私は祈  
ねがわ  
るのであります。しかしこの私は学校を出て三十以上まで通り越せなかったのです。その苦痛は無  
いの  
論鈍痛ではありましたが、年々歳々感ずる痛には相違なかったのであります。だからもし私  
どんつう  
のような病気に罹った人が、もしこの中にあるならば、どうぞ勇猛にお進みにならん事を希望し  
さいさい  
てやまないのです。もしそこまで行ければ、ここにおれの尻を落ちつける場所があったのだとい  
いたみ  
う事実をご発見になって、生涯の安心と自信を握る事ができるようになると思うから申し上げ  
ゆうもう  
るのです。

べん  
今まで申し上げた事はこの講演の第一篇に相当するものですが、私はこれからその第二篇に移  
ろうかと考えます。学習院という学校は社会的地位の好い人が這入る学校のように世間から見倣  
みな  
されております。そうしてそれがおそらく事実なのでしょう。もし私の推察通り大した貧民はこ  
こへ来ないで、むしろ上流社会の子弟ばかりが集まっているとすれば、向後あなたがたに附随し  
かんげん  
てくるもののうちで第一に挙げなければならないのは権力であります。換言すると、あなた方  
が世間へ出れば、貧民が世の中に立った時よりも余計権力が使えるという事なのです。前申した  
、仕事をして何かに掘りあてるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心の  
ためには相違ありませんが、なぜそれが幸福と安心とをもたらすかということ、あなた方のもって  
生れた個性がそこにぶつかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに尻を落ちつけて  
だんだん前の方へ進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああここにおれ  
の安住の地位があったと、あなた方の仕事とあなたがたの個性が、じっくり合った時に、始めて  
云い得るのでしょう。

ざんみ さつき  
これと同じような意味で、今申し上げた権力というものを吟味してみると、権力とは先刻お話  
お  
した自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に押しつける道具なのです。道具だと断然云い切っ  
て  
わるければ、そんな道具に使い得る利器なのです。

権力に次ぐものは金力です。これもあなたがたは貧民よりも余計に所有しておられるに相違  
ない。この金力を同じくそうした意味から眺めると、これは個性を拡張するために、他人の上  
ゆうわく  
に誘惑の道具として使用し得る至極重宝なものになるのです。

びんぼうにん かぶ  
してみると権力と金力とは自分の個性を貧乏人より余計に、他人の上に押し被せるとか、ま

たは他人をその方面に誘き寄せるとかいう点において、大変便宜な道具だと云わなければなりません。こういう力があるから、偉いようでいて、その実非常に危険なのです。先刻申した個性はおもに学問とか文芸とか趣味とかについて自己の落ちつくべき所まで行って始めて発展するようにお話し致したのですが、実をいうとその応用ははなはだ広いもので、単に学芸だけにはとどまらないのです。私の知っている兄弟で、弟の方は家に引込んで書物などを読む事が好きなのに引き易えて、兄はまた釣道楽に憂身をやつしているのがあります。するとこの兄が自分の弟の引込思案でただ家にばかり引籠っているのを非常に忌まわしいもののように考えるのです。必竟は釣をしないからああいう風に厭世的になるのだと合点して、むやみに弟を釣に引張り出そうとするのです。弟はまたそれが不愉快でたまらないのだけれども、兄が高圧的に釣竿を担がしたり、魚籃を掲げさせたりして、釣堀へ随行を命ずるものだから、まあ目を瞑ってくっついて行って、気味の悪い鮎などを釣っていやいや帰ってくるのです。それがために兄の計画通り弟の性質が直ったかという、けっしてそうではない、ますますこの釣というものに対して反抗心を起してくるようになります。つまり釣と兄の性質とはぴたりと合ってその間に何の隙間もないのでしようが、それはいわゆる兄の個性で、弟とはまるで交渉がないのです。これはもとより金力の例ではありません、権力の他を威圧する説明になるのです。兄の個性が弟を圧迫して無理に魚を釣らせるのですから。もっともある場合には、——例えば授業を受ける時とか、兵隊になった時とか、また寄宿舎でも軍隊生活を主位におくとか——すべてそう云った場合には多少この高圧的手段は免かれますまい。しかし私はおもにあなたがたが一本立になって世間へ出た時の事を云っているのだからそのつもりで聴いて下さらなくては困ります。

そこで前申した通り自分が好いと思った事、好きな事、自分と性の合う事、幸にそこにぶつかって自分の個性を発展させて行くうちには、自他の区別を忘れて、どうかあいつもおれの仲間引き摺り込んでやろうという気になる。その時権力があると前云った兄弟のような変な関係が出来上るし、また金力があると、それをふりまいて、他を自分のようなものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分に気に入るように変化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

それで私は常からこう考えています。第一にあなたがたは自分の個性が発展できるような場所に尻を落ちつけべく、自分とぴたりと合った仕事を発見するまで邁進しなければ一生の不幸であると。しかし自分がそれだけの個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対してもその個性を認めて、彼らの傾向を尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事としか私には見えません。自分は天性右を向いているから、あいつが左を向いているのは怪しからんというのは不都合じゃないかと思うのです。もっとも複雑な分子の寄って出来上った善悪とか邪正とかいう問題になると、少々込み入った解剖の力を借りなければ何とも申されませんが、そうした問題の関係して来ない場合もしくは関係しても面倒でない場合には、自分が他から自由を享有している限り、他にも同程度の自由を与えて、同等に取り扱わなけ

ればならん事と信ずるよりほかに仕方がないのです。

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴ふちょうに使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を云いながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性おのを勝手に発展するのを、相当の理由なくして妨害ぼうがいしてはならないのであります。私はなぜここに妨害という字を使うかという、あなたがたは正しく妨害し得る地位に将来立つ人が多いからです。あなたがたのうちには権力を用い得る人があり、また金力を用い得る人がたくさんあるからです。

元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなた方を見下して、一時間なり二時間なり私の云う事を静肅せいしゆくに聴いていただく権利を保留する以上、私の方でもあなた方を静肅にさせるだけの説を述べなければすまないはずだと思います。よし平凡へいぼんな講演をするにしても、私の態度なり様子なりが、あなたがたをして礼を正さしむるだけの立派さをもっていなければならぬのものであります。ただ私はお客である、あなたがたは主人である、だからおとなしくしなくてはならない、とこう云おうとすれば云われない事もないでしょうが、それは上面うわつらの礼式にとどまる事で、精神には何の関係もない云わば因襲いんしゆくといったようなものですから、てんで議論にはならないのです。別の例を挙げてみますと、あなたがたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。しかし叱りっ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、その先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えてくれるにきまっています。叱る権利をもつ先生はすなわち教える義務をももっているはずなのです。先生は規律をただすため、秩序ちつじょを保つために与えられた権利を十分に使うでしょう。その代りその権利と引き離す事のできない義務も尽さなければ、教師の職おおを勤め終せる訳に行きません。

金力についても同じ事であり、私の考かんがえによると、責任を解しない金力家は、世の中にあつてならないものなのです。その訳を一口にお話しするとこうなります。金銭というものは至極重宝ゆうずうなもので、何へでも自由自在に融通もうが利く。たとえば今私がここで、相場をして十万円儲けたとすると、その十万円で家屋を立てる事もできるし、書籍しょせきを買う事もできるし、または花柳かりゆう社界にぎを賑わす事もできるし、つまりどんな形にでも変って行く事ができます。そのうちでも人間の精神を買う手段に使用できるのだから恐ろしいではありませんか。すなわちそれをふりまいて、人間の徳義心しを買い占める、すなわちその人の魂たましいを墮落させる道具とするのです。相場でも儲けた金もうが徳義的倫理的に大きな威力をもって働らき得るとすれば、どうしても不都合な応用と云わなければならないかと思われま。思われるのですけれども、実際その通りに金が活動する以上は致し方がない。ただ金を所有している人が、相当の徳義心をもって、それを道義上害のないように使いこなすよりほかに、人心の腐敗ふはいを防ぐ道はなくなってしまうのです。それで私は金力には必ず責任がついて廻らなければならないといいたくなります。自分は今これだけの富の所有者であるが、それをこういう方面にこう使えば、こういう結果になるし、ああいう社会にああ

用いばああいう <sup>えいきょう</sup> 影響 があると呑み込むだけの見識を養成するばかりでなく、その見識に応じて、責任をもってわが富を所置しなければ、世の中にすまないと云うのです。いな自分自身にもすむまいというのです。

今までの論旨を <sup>ろんし</sup> かい <sup>つま</sup> 摘んでみると、第一に自己の個性の発展を <sup>しと</sup> 仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬという事。第二に自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに附随している義務というものを心得なければならぬという事。第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに <sup>ともな</sup> 伴 <sup>おもん</sup> う責任を <sup>しと</sup> 重 <sup>おもん</sup> じなければならぬという事。つまりこの三カ条に帰着するのであります。

これをほかの言葉で言い直すと、いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を発展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍 <sup>べん</sup> 云 <sup>か</sup> い換 <sup>う</sup> えると、この三者を自由に享 <sup>う</sup> け楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起って来るといふのです。もし人格のないものが <sup>ひと</sup> む <sup>らんよう</sup> やみに個性を発展しようとする <sup>ひと</sup> と、他 <sup>ひと</sup> を妨害する、権力を用 <sup>らんよう</sup> いようとする <sup>てい</sup> と、濫用 <sup>てい</sup> に流 <sup>てい</sup> れる、金力を使おうとすれば、社会の腐敗をもたらす。ずいぶん危険な現象を呈 <sup>てい</sup> するに至るのです。そうしてこの三つのものは、あなたがたが将来において最も接近しやすいものであるから、あなたがたはどうしても人格のある立派な人間になっておかななくては行かないだろうと思ひます。

話が少し横へそれますが、ご存じの通り <sup>イギリス</sup> 英吉利という国は大変自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調った国はありません。実をいうと私は英吉利を好 <sup>きら</sup> かないのです。嫌 <sup>きら</sup> いではあるが事実だから仕方なしに申し上げます。あれほど自由でそうしてあれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。日本などはどう <sup>ひかく</sup> てい比較 <sup>ひかく</sup> にもなりません。しかし彼らはただ自由なのではありません。自分の自由を愛するとともに他の自由を尊敬するように、小供の時分から社会的教育をちゃんと受けているのです。だから彼らの自由の背後にはきっと義務という観念が伴っています。England expects every man to do his duty といった有名なネルソンの言葉はけっして当座限りの意味のものではないのです。彼らの自由と表裏して発達して来た深い <sup>こんてい</sup> 根柢 <sup>ちがい</sup> をもった思想 <sup>ちがい</sup> に違 <sup>ちがい</sup> ないのです。

彼らは不平があるとよく示威運動をやります。しかし政府はけっして <sup>かんしょう</sup> 干渉 <sup>かんしょう</sup> がましい事をしません。黙 <sup>かんしょう</sup> って放 <sup>かんしょう</sup> っておくのです。その代り示威運動をやる方でもちゃんと心得ていて、むやみに <sup>めいわく</sup> 政府 <sup>めいわく</sup> の迷惑 <sup>めいわく</sup> になるような乱暴は働かないのです。近頃女権拡張論者と云ったようなものがむやみに <sup>ろうぜき</sup> 狼藉 <sup>ろうぜき</sup> をするように新聞などに見えていますが、あれはまあ例外です。例外にしては数が多過ぎると云われればそれまでですが、どうも例外と見るよりほかに仕方がないようです。嫁に行かれないとか、職業が見つからないとか、または昔しから養成された、女を尊敬するという気風につ <sup>よめ</sup> け <sup>よめ</sup> 込むのか、何しろあれは英国人の平生の態度ではないようです。名画を破る、<sup>かんごく</sup> 監獄 <sup>だんじき</sup> で断食 <sup>だんじき</sup> して <sup>ごくてい</sup> 獄丁 <sup>ごくてい</sup> を困らせる、議会のベンチへ身体を縛 <sup>からだ</sup> り <sup>しば</sup> つけておいて、わざわざ騒 <sup>そうぞう</sup> 々 <sup>そうぞう</sup> しく叫 <sup>そうぞう</sup> び立てる。これは意外の現象ですが、ことによると女は何をしても男の方で遠慮するから構わないという意味でやっているのかも分りません。しかしまあどういふ理由にしても変則らしい気がします。一般の英国気質というものは、今お話しした通り義務の観念を離れない程度において自由を愛して

いるようです。

それで私は何も英国を手本にするという意味ではないのですけれども、要するに義務心を持っていない自由は本当の自由ではないと考えます。と云うものは、そうしたわがままな自由は決して社会に存在し得ないからであります。よし存在してもすぐ他から排斥され踏み潰されるにきまっているからです。私はあなたがたが自由にあらん事を切望するものであります。同時にあなたがたが義務というものを納得せられん事を願ってやまないものであります。こういう意味において、私は個人主義だと公言して憚らないつもりです。

この個人主義という意味に誤解があってははいけません。ことにあなたがたのようなお若い人に対して誤解を吹き込んで私がおすみませんから、その辺はよくご注意を願っておきます。時間が逼っているからなるべく単簡に説明致しますが、個人の自由は先刻お話しした個性の発展上極めて必要なものであって、その個性の発展がまたあなたがたの幸福に非常な関係を及ぼすのだから、どうしても他に影響のない限り、僕は左を向く、君は右を向いても差支ないくらいの自由は、自分でも把持し、他人にも附与しなくてはなるまいかと考えられます。それがとりも直さず私のいう個人主義なのです。金力権力の点においてもその通りで、俺の好かないやつだから畳んでしまえとか、気に喰わない者だからやっつけてしまえとか、悪い事もないのに、ただそれらを濫用したらどうでしょう。人間の個性はそれで全く破壊されると同時に、人間の不幸もそこから起らなければなりません。たとえば私が何も不都合を働らかないのに、単に政府に気に入らないからと云って、警視總監が巡査に私の家を取り巻かせたらどんなものでしょう。警視總監にそれだけの権力はあるかも知れないが、徳義はそういう権力の使用を彼に許さないものであります。または三井とか岩崎とかいう豪商が、私を嫌うというだけの意味で、私の家の召使を買収して事ごとに私に反抗させたなら、これまたどんなものでしょう。もし彼らの金力の背後に人格というものが多少でもあるならば、彼らはけっしてそんな無法を働らく気にはなれないのであります。

こうした弊害はみな道義上の個人主義を理解し得ないから起るので、自分だけを、権力なり金力なりで、一般に押し広めようとするわがままにほかならぬのであります。だから個人主義、私のここに述べる個人主義というものは、けっして俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないで、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私の解釈なので、立派な主義だろうと私は考えているのです。

もっと解りやすく云えば、党派心がなくって理非がある主義なのです。朋党を結び団隊を作って、権力や金力のために盲動しないという事なのです。それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は私の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。私がかつて朝日新聞の文芸欄を担任していた頃、だれであったか、三宅雪嶺さんの悪口を書いた事がありました。もちろん人身攻撃ではないので、ただ批評に過ぎないのです。しかもそれがたった二三行あったのです。出たのはいつごろでしたか、私は担任者であったけれども病気をしたからあるいはその病氣中かも知れず、

または病氣中でなくて、私が出して好いと認定したのかも知れません。とにかくその批評が朝日の文芸欄に載ったのです。すると「日本及び日本人」の連中が怒りました。私の所へ直接にはかけ合わなかったけれども、当時私の下働きをしていた男に<sup>とりけし</sup>取消を申し込んで来ました。それが本人からではないのです。雪嶺さんの子分——子分というとは何か博奕打のようでおかしいが、——まあ同人といったようなものでしょう、どうしても取り消せというのです。それが事実の問題ならもっともですけれども、批評なんだから仕方がないじゃありませんか。私の方ではこちらの自由だというよりほかに途はないのです。しかもそうした取消を申し込んだ「日本及び日本人」の一部では毎号私の悪口を書いている人があるのだからなおのこと人を驚ろかせるのです。私は直接談判はしませんでしたけれども、その話を間接に聞いた時、変な<sup>こころもち</sup>心持がしました。というのは、私の方は個人主義でやっているのに反して、向うは党派主義で活動しているらしく思われたからです。当時私は私の作物をわるく評したものさえ、自分の担任している文芸欄へ載せたくらいですから、彼らのいわゆる同人なるものが、一度に雪嶺さんに対する評語が気に入らないと云って怒ったのを、驚ろきもしましたし、また変にも感じました。失礼ながら時代後れだとも思いました。<sup>ほうけん</sup>封建時代の人間の団隊のようにも考えました。しかしそう考えた私はついに一種の淋しさを<sup>だっきやく</sup>脱却する訳に行かなかったのです。私は意見の相違はいかに親しい<sup>あいだがら</sup>間柄でもどうする事もできないとっていましたから、私の家に入出入りする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に<sup>よくあつ</sup>抑圧を加えるような事は、他に重大な理由のない限り、<sup>ひと</sup>けっしてやった事がないのです。私は他の存在をそれほどに認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感ずるような事があっても、<sup>こうはい</sup>けっして助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しさです。個人主義は人を目標として向背を決する前に、まず理非を明らかに、去就を定めるのだから、ある場合にはたった一人ぼっちになって、淋しい心持がするのです。それはそのはずです。<sup>まぎざっぽう</sup>榎雑木でも<sup>たば</sup>束になっていれば<sup>こころじょうぶ</sup>心丈夫ですから。それからもう一つ誤解を防ぐために一言しておきたいのですが、何だか個人主義というところと国家主義の反対で、それを打ち壊すように取られますが、そんな理窟の立たない<sup>まんぜん</sup>漫然としたものではないのです。いったい何々主義という事は私のあまり好まないところで、人間がそう一つ主義に片づけられるものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここにはやむをえず、主義という文字の下にいろいろの事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなければ立ち行かないように云いふらしたそう考えています。しかも個人主義なるものを<sup>じゅうりん</sup>蹂躪しなければ国家が<sup>ほろ</sup>亡びるような事を唱道するものも少なくはありません。けれどもそんな馬鹿気たはずはけっしてありようがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

個人の幸福の<sup>きそ</sup>基礎となるべき個人主義は個人の自由がその内容になっているには相違ありませんが、各人の<sup>きょうゆう</sup>享有するその自由というものは国家の安危に従って、寒暖計のように上ったり下ったりするのです。これは理論というよりもむしろ事実から出る理論と云った方が好いかも知れません、つまり自然の状態がそうなるのです。国家が危くなれば個人の自由が<sup>せば</sup>狭められ、国家が<sup>たいへい</sup>泰平の時には個人の自由が<sup>ぼうちよう</sup>膨脹して来る、それが当然の話です。いやしくも人格のある

以上、それを踏み違えて、国家の亡びるか亡びないかという場合に、<sup>かんちが</sup> 疝違いをしてただむやみに個性の発展ばかりめがけている人はないはずです。私のいう個人主義のうちには、火事が済んでもまだ<sup>ずきん</sup> 火事頭巾が必要だと云って、用もないのに窮屈くわがる人に対する忠告も含まれていると考えて下さい。また例になります、昔し私が高等学校にいた時分、ある会を創設したものがありました。その名も<sup>くわ</sup> 主意も詳しい事は忘れてしまいましたが、何しろそれは国家主義を<sup>ひょうぼう</sup> 標榜したやかましい会でした。もちろん悪い会でも何でもありません。当時の校長の木下広次さんなどは大分肩を入れていた様子でした。その会員はみんな胸にめだるを下げていました。私はめだるだけ<sup>めんこうむ</sup> 免蒙りしましたが、それでも会員にはされたのです。無論発起人でないから、ずいぶん異存もあったのですが、まあ入っても差支なからうという主意から入会しました。ところがその発会式が広い講堂で行なわれた時に、何かの<sup>はずみ</sup> 機でしたろう、一人の会員が壇上に立って演説めいた事をやりました。ところが会員ではあったけれども私の意見には大分反対のところもあったので、私はその前ずいぶんその会の主意を攻撃していたように記憶しています。しかるにいよいよ発会式となって、今申した男の演説を聴いてみると、全く私の説の<sup>はんぱく</sup> 反駁に過ぎないのです。故意だか偶然だか解りませんが、勢い私はそれに対して答弁の必要が出て来ました。私は仕方なしに、その人のあとから演壇に上りました。当時の私の態度なり行儀なりははなはだ見苦しいものだと思いますが、それでも簡潔に云う事だけは云って退けました。ではその時何と云ったかとお尋ねになるかも知れませんが、それはすこぶる簡単なのです。私はこう云いました。——国家は大切かも知れないが、そう朝から晩まで国家国家と云ってあたかも国家に取りつかれたような真似はとうてい我々にできる話でない。<sup>じょうじゅうざが</sup> 常住坐臥国家の事以外を考えてならないという人はあ<sup>とうふ</sup> るかも知れないが、そう間断なく一つ事を考えている人は事実あり得ない。豆腐屋が豆腐を売ってあるくのは、けっして国家のために売って歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあろうともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になっているかも知れない。これと同じ事で、今日の午に私は飯を三<sup>ひる</sup> 杯たべた、晩にはそれを四杯に殖ふやしたというのも必ずしも国家のために増減したのではない。正直に云えば胃の具合できめたのである。しかしこれらも間接のまた間接に云えば天下に影響しないとは限らない、<sup>みかた</sup> 否観方によっては世界の<sup>いくぶん</sup> 大勢に幾分か関係していないとも限らない。しかしながら<sup>かんじん</sup> 肝心の当人はそんな事を考えて、国家のために飯を食わせられたり、国家のために顔を洗しょうれいわせられたり、また国家のために便所に行かせられたりしては大変である。国家主義を<sup>よそお</sup> 奨励するのはいくらしても差支ないが、事実できない事をあたかも国家のためにするごとくに<sup>よそお</sup> 装うのは偽りである。——私の答弁はざっとこんなものでありました。

いったい国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考えないものは一人もない。国が<sup>うれい</sup> 強く戦争の憂が少なく、そうして他から犯される憂がなければいほど、国家的観念は少なくなつてしかるべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは理の当然と申すよりほかに仕方がないのです。今の日本はそれほど安泰でもないでしょう。貧乏である上に、国が小さい。したがっていつどんな事が起ってくるかも知れない。そういう意味から見て吾々は国

家の事を考えていなければならぬのです。けれどもその日本が今が今潰れるとか滅亡の憂目にあうとかいう国柄でない以上は、そう国家国家と騒ぎ廻る必要はないはずで、火事の起らない先に<sup>しょうぞく</sup> 装束をつけて窮屈な思いをしながら、町内中<sup>か</sup>駈け歩くのと一般であります。必竟ずるにこういう事は実際程度問題で、いよいよ戦争が起った時とか、危急存亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてはられない人格の修養の積んだ人は、自然そちらへ向いて行く訳で、個人の自由を<sup>そくばく</sup>束縛し個人の活動を切りつめても、国家のために尽すようになるのは天然自然と云っていいくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺し合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。この点についても、もっと詳しく申し上げたいのですけれども時間がないからこのくらいにして切り上げておきます。ただもう一つご注意までに申し上げておきたいのは、国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくらやかましくつても、徳義心はそんなにありやしません。<sup>さぎ</sup>詐欺をやる、ごまかしをやる、ペテンにかける、めちゃくちゃなものであります。だから国家を標準とする以上、国家を一団と見る以上、よほど低級な<sup>あま</sup>道德に甘んじて平気でいなければならないのに、個人主義の基礎から考えると、それが大変高くなつて来るのですから考えなければなりません。だから国家の<sup>へいおん</sup>平穩な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きをおく方が、私にはどうしても当然のように思われます。その辺は時間がないから今日はそれより以上申上げる訳に参りません。

私はせっかくのご招待だから今日まかり出て、できるだけ個人の生涯を送らるべきあなたがたに個人主義の必要を説きました。これはあなたがたが世の中へ出られた後、幾分かご参考になるだろうと思うからであります。はたして私のいう事が、あなた方に通じたかどうか、私には分かりませんが、もし私の意味に不明のところがあるとすれば、それは私の言い方が足りないか、または悪いかだろろうと思ひます。で私の云うところに、もし<sup>あいまい</sup>曖昧の点があるなら、好い加減にきめないうで、私の宅までおいで下さい。できるだけはいつでも説明するつもりでありますから。またそういう<sup>じゅうぶん</sup>手数を尽さないでも、私の本意が充分ご会得になったなら、私の満足はこれに越した事はあります。あまり時間が長くなりますからこれでご免を蒙ります。



私の個人主義

平成二十三年二月二十五日 初版

著者

夏目 漱石

発行所

藍岩堂

